

〈礼拝説教〉 2012年 1月 8日

## 天地創造一〇 新しい人を身に着けて！

創世記 1章 26～31節 コロサイの信徒への手紙 3章 1～11節

武 田 真 治

### 1、自らを現される神

有名な短歌に「何事のおはしますかは しらねども かたじけなさに なみだこぼるる」という句があります。平安時代を生きた僧、西行が伊勢神宮を参拝した時の一句だと言われています。

伊勢神宮の近くに育った私にとっては小さい頃からよく聞かされた句ですが、日本人のメンタリィーをよく表現している句だと思えます。つまり、神様という存在は日常とかけ離れた存在であり、逆に奥深く隠れていてよく分らない方がよりありがたさを感じさせるものだというような。

しかし神様がそのような存在では、どのようにして現実を生きる私たちに力を与えてくれるのでしょうか？そのような神様を信じる信仰では、どのようにして生きる力や支えとなることができるのでしょうか。

聖書が示してくれている真の神様は、むしろ自らを現される神様です。それは、今日の聖書の箇所にも『神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された』とあることから分ります。私たち人間にご自身の「形」を写してくださっていると。それは逆に言えば、私たち自身の中に「神の形」が与えられており、私たちのただ中に神様が現されているとも言い得るのです。

### 2、私たちの「神の形」とは？

私たちが神様にかたどられ、神様に似ており、自分の中に「神の形」が存在していると言われま

すと、その「神の形」はどうしても何か立派なものだと考えます。

例えば、他の動物は持っていない知性や思考力とか、或いは道徳心や良心、愛情など神様に通じられると思われるような物を考えてしまいます。しかし、知性や思考力を持っていることが必ずしも神様に喜ばれる行動を為すかというところではありません。むしろその知恵で核兵器や原子爆弾を作ってしまった。また、私たちの道徳心や理性はいざという時にはほとんど当てにならないものですし、愛情からその相手を束縛し、しいては殺人にまで至ることもあります。これこそ神様に通じる「神の形」だと言い得るものは、どうもそのような人間の中にある特別な才能とか性質の一つとかではないようです。

この私たちが神様から与えられている「神の形」について、多くの解説者が語っていることは、それは私たちが神様に「応答することが出来る」ということだと見做しています。つまり、神様はご自分に答えることができる存在として人間を創造したのだと。そのために、神様はご自分に似せて人を創造されたのだと。

このことについて、例えば、犬やねこの言葉は私たちには分かりませんが、犬類であれば、柴犬でもポメラニアンでも言葉は通じますし、三毛猫でもシャム猫でも猫同志であるならば話は通じます。でも、犬と猫は話が通じません。そのような通じ合えるものが各々の「形」だと考えれば、人間に「神の形」が分け与えられているということは、神様からの語りかけや通信を人間はちゃんとキャッチできるということになります。本来、私たち人間は神様の言葉や思いを正しく受け止められる存在であったということなのです。

その意味で天地創造の出来事をもう一度読み返してみますと、確かに今まで神様はすべての被造

物に命令を与えて来られました。「光あれ」とか「地は草を芽生えさせよ」「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ」などのように。その点は、造られた人間にも「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」（28 節）との命令が与えられています。人間が他の被造物とその立場に於いては同じであることが示されています。しかし、その後で「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる」（29 節）と神様は人間に語り掛けておられます。これはもはや命令ではありません。「あなたたち」と言われているように、私たち人間と話をしようとしておられるのです。呼べば答えてくれる存在として語り掛けられているのです。それはそのようなご自分に応答してくれる「神の形」を持つ存在として人間を造れたからなのです。

### 3、「支配する」ことの意味

神様は人間を創造する際に「我々（＝この複数形については既に見ましたように、一人の神様のご自身と似せて人間を造られた時に一気に「男と女に創造された」ということから分るように、ご自身の中に様々な面を持っておられること、後の三位一体に通じる豊かさがありであることを示す表現と受け取られます）に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」と語られています。

ここでの「支配する」という表現が、いかにも人間の優越性や万物の霊長であるが如き誤解を生み、人類が自然や動物をわが物顔に好き勝手に扱ってよいかのように言われて来た悲しい歴史があります。しかし神様のここでの思いは、そのようなご自身の意志や思いを受け止め、それに沿って生きていける「神の形」を持つ人間だからこそ、この世界の維持や保持、そこで神様の思いを具体

的に成就させていくことを任されたのであって、決して自分たちの都合のよいように世界を支配できる権利や立場を得た訳ではないのです。応答してくれることを期待して神様は私たち人間にこの世界の一部を維持する務めを与えて下さったのです。そのために知恵や力、愛情や理性を人間に与えられたのではないのでしょうか。

#### 4、「神の形」を無視してしまう人間

しかしこの後、創世記 3 章に至りますとそのように造られた人間が、神様のその期待に反して世界の秩序を自ら壊して行く行動を起こしてしまうのです。即ち、禁断の木の実を取って食べてしまう行動です。

その行動を起こす前に「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました」とエバは答えています。ちゃんと神様からの言葉が与えられていたことが分ります。にもかかわらず意図的に背いて「取って食べて」しまったのでした。

その結果「その日、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れる」という状態に陥ってしまいます。もはや神様との交信を避ける人間の姿が記されています。「神の形」を与えられながらも、それをういないで我がままに生きようとする人間の姿がここにはあります。それこそが「罪ある人間の姿」です。そして、以後の人間たちはどんどん神様から離れ、与えられた「神の形」を無視する生き方を進めてしまいます。そして、我が物顔に世界を支配し、自然から搾取するばかりの愚か者へとなっていくのです。

神様はしかしそのような人間にも「主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか』」と尚も語

りかけようとして下さっています。言葉が通じるはずだからです。

## 5、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に

神様の語り掛けに答えなくなってしまい、もはや神様の言葉に耳を傾けることさえしなくなっていた罪ある私たちに対し、イエス様は、その罪を取り除き、神様ともう一度交信できる道を示して下さい、更に自らその道を歩いて開いて下さったのでした。そして本来、私たちに与えられている「神の形」を再生して下さい、み言葉に聞き神様の御旨に応答していくことが出来るようにして下さい、さったのです。

それ故、コロサイの信徒への手紙に於いて伝道者パウロは私たちに勧めるのです。

即ち、「互いにうそをついてはなりません。古い人（＝アダムの子孫としての生き方）をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人（＝イエス様が取り戻して下さい、本来の人間の生き方）を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。そこには、もはや、ギリシャ人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者の区別はありません。」と。そして、続けて「キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです」と語り、そのために「聖霊」を私たちの内に送ってくださることに触れてくれています。

私自身、かつての自分は神様のことさえ考えない者でした。しかし、そのような時でもずっと神様は私に語りかけて下さっていました。「お前はどこにいるのか」と探し求めて下さっていました。

イエス様の導きのおかげでようやくその声に耳を傾けるようになったように思います。

神様は私たち人間に今でも期待をしてこの世界を支えて下さっています。その思いに少しでも答えて、応じていく者でありたい。

（説教より抜粋）